

# 第19回アジア太平洋雑草学会及び 台湾北部農業事情調査に参加して

財団法人 日本植物調節剤研究協会 主査研究員 田中十城

## 1. はじめに

本年3月にアジア太平洋雑草学会(通称=APWSS:Asian-Pacific Weed Science Society)の第19回大会が、フィリピン・マニラ市において開催された。大会は隔年で行われているが、植調協会では、毎回公立農業試験機関及び植調関係者で調査団を編成し、学会を中心に周辺地域の農業施設等の視察を行い、国際会議や海外の農業事情等を見聞し参加者の見識を深める目的で「APWSS植調ツアー」を企画・実施してきた。今回も、植調協会則武専務理事団長以下15名で調査団を編成し、全行程7日間の日程で学会出席及び台湾北部の農業施設等の視察を行ったので、その状況を報告する。

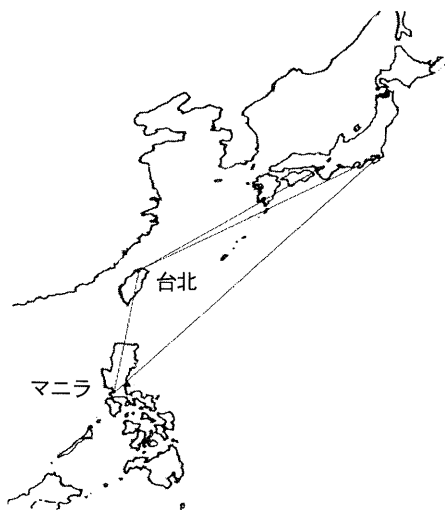


図-1 旅行行程図

時間のかかった手荷物検査や出国審査の後、定刻通り午前9時45分に成田空港を出航した。

## 2. 出国

戦争突入かどうかの世界情勢が気になりながら、成田空港特別待合室において3月16日午前8時30分に予定通り結団式が行われた。結団式では、団長(則武専務理事)から治安情勢が不安なフィリピンであることから滞在中の厳重な注意が参加者全員に勧告された。テレビや新聞では緊迫した状況を報じているものの、そのような報道は1ヶ月以上もつづいており実際にフィリピン滞在中にイラク攻撃が開始されると予想する参加者は、この時点では少なかつたと思われる。

## 3. マニラ

フィリピン・マニラには定刻より早く到着した。空港から宿泊場所でもある学会会場の「THE WESTIN PHILIPPINE PLAZA」へはバスで移動。車窓からは、南国特有のヤシの木と非常に多い車が目に付いた。天候は快晴、気温は30℃を超えているものの、湿度は少なく、日本のような不快感はあまり感じられなかった。

ホテル到着後、学会登録を済ませ会場を下見した。ホテル内ではフィリピン人の他に、学会参加の日本からの出席者も多くみられ、海外の

ホテルに宿泊し国際会議に出席するという実感をもてる雰囲気は少ない状況であった。

ホテルはマニラ湾に面して、数多いヤシの木の中に屋外レストランやプールが備えられた南国独特の庭を囲むかたちで建てられ、広々とゆ



写真-1 APWSS会場となったホテル

ったりとした気分を味わえるものであった。

#### 4. APWSS

1967年に第1回大会がハワイで開かれたあと今年で19回目となる今大会は、日本を含む17ヶ国から200名弱の参加者があった。世界情勢と相まってかその数は300名を超えた前回の北京



写真-2 APWSS開会のテープカットの様子

大会より100名ほど少ない状況での開催となった。

予定より30分程度遅れて開会式が行われた。フィリピン雑草学会(WSSP: Science Society of the Philippines)のJose D. j. Cruz会長により開会が宣言され、基調講演とAPWSSの歴史が紹介された。フィリピンでは国民の90%以上がキリスト教であることから、開会宣言の前にはお祈りの時間がプログラムの中に盛り込まれてあり、このことは英語による会の進行よりも、日本の会議には無い異国の地での国際会議を強く認識・印象付けさせるものであった。



写真-3 APWSS参加者 開会式会場にて

開会式後は昼食を挟んで全体会議が催された。その会議では主に雑草科学における研究・教育・普及の発展について4課題が発表され、白熱した質疑応答を体験することができた。会議中はどちらかといえばユーモラスで、肩の凝らない誰でも参加できる友好的な雰囲気を感じた。

今回の主要テーマは「雑草科学、環境にやさしい持続的農業及び遺伝子組換え作物」であり、5日間の日程で招待講演やシンポジウムなど15課題、85の一般講演、44のポスター発表、フィールドトリップなどが執り行われた。また、農薬メーカー5社（バイエルクロップサイエンス株式会社、クミアイ化学工業株式会社、シンジェンタ株式会社、デュポン株式会社、モンサント株式会社）の除草剤を中心とした展示ブースが設けられ、ビデオやポスターを使用しての除草剤の紹介などが行われていた。

大会初日の夜は、ウエルカムレセプションが開かれ簡単な食事をとりながらの賛美歌や、毎回恒例となっているらしい参加者の自由参加による自国の歌が合唱されるなど、参加者一同親睦を深めながらの和やかな時間が過ぎていった。

## 5. 国際稲研究所

大会3日目には、フィールドトリップとして



写真-4 IRRI施設内展示エリア

国際稲研究所 (IRRI:International Rice Research Institute)とその他にも景勝地などが設定されていた。

THE WESTIN PHILIPPINE PLAZAをバス4台で早朝6時に出発し、タガタイなどの景勝地を散策した後国際稲研究所へ向かった。車窓からは、農村を通過する際に熱帯特有の移植期や生育中期・登熟期の水田が混在している様子やマンゴー栽培中の果樹園等を眺めることができた。

国際稲研究所は、30箇所以上の国や国際機関からの援助を受け、1000人以上の研究者が在籍する1960年に設立され稲を対象とした非営利の研究施設であり、発展途上国や痩せた土地での生産性向上を目標とした研究がなされている。既に100を超える品種を生みだし、農家の生産力と収入を増加させることで、世界の食糧生産に大きく貢献している。

今回設定されていたのは、見学者用と思われる展示エリアの見学と試験圃場の紹介であった。

展示エリアには、徐々に増え続けている世界人口と徐々に減り続けている水田作付け面積が平行してリアルタイムでカウントし続けられているモニターや、水田や浮き苗等のポスター、昆虫標本や写真等が展示されていた。

試験圃場では、異なる水稻栽培方法による栽



写真-5 IRRIの試験圃場紹介の様子

培中の水田を前に、試験担当の方からそれぞれの栽培法の特徴や試験内容についての説明が行われた。圃場(1筆12.5a)毎に栽培方法が異なり、それぞれに除草区とアゼガヤやコゴメガヤツリの発生が目立つ無除草区が設定されていた。栽培方法は、湛水移植、湛水散播、乾田機械移植、SRI(System of Rice Intensification)、ベッド式乾田散播、不耕起乾田機械直播の6種類であり、これらの栽培方法における収量、労働時間、播種量、燃料、肥料や農薬の使用量等について検証が行われていた。また、試験圃場には、大型のトラクターや直播用播種機、散布機械の展示があった。

## 6. マニラ→台北

マニラ国際空港に向かう車中で、ガイドから現地時間の午前9時にアメリカ・イギリス連合軍によるイラク攻撃が開始されたことが告げられ、テロ・ハイジャック等やや緊張感漂うフィリピン出国となった。台北に到着すれば、危険性はかなり低くなるが、数日前から新型肺炎(重症急性呼吸器症候群=SARS: Severe Acute Respiratory Syndrome)の発生が報じられていたことから複雑な心境であった。

フィリピンを飛び立ち約2時間の飛行後、何もなく台北国際空港へ到着。想像したとおり入国審査には時間がかかった。

空港から宿泊場所となる台北市内まで約1時間。マニラ市内のように車が入り乱れてはいないものの交通量は多く、ここでも渋滞であった。天候は雨、気温は15℃を下回りやや肌寒かった。台湾は水不足であり数日前から曇の日が続き、時折雨は降るものの雨量は少なく、4月から厳しい給水制限が実施されるという事であった。給水制限には水田への水の供給も対象となって

いるようで事態は深刻化していた。車窓から時折見える水田に、田面が露出しているものが多かったことは、これらの事態を物語っているかのように思われた。

## 7. 桃園区農業改良場

台湾では、桃園区農業改良場の視察を行った。

正式には行政院農業委員会桃園区農業改良場であり、1982年に台湾省台北区農業改良場と台湾省新竹区農業改良場が合併し台湾省桃園区農業改良場となり、1999年にこの名称に改められた。桃園区農業改良場は、桃園区にある本場の他に蔬菜・花卉中心に試験研究を行っている台北分場と高冷地での試験研究を行っている五峰工作站(五峰支場)で構成されている。今回訪れ

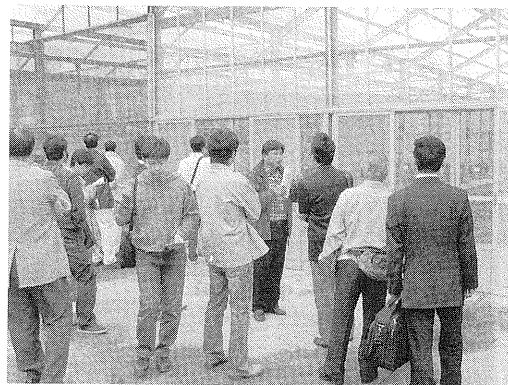


写真-6 桃園区農業改良場の温室

たのは桃園区にある本場であり、台北市から西へ車で約1時間半の場所に位置している。

台湾には7つの改良場があり、台湾北部を管轄しているのが桃園区農業改良場である。150人近くの職員が在籍し、日本の公立農業試験場と同様に農業に関する試験研究のほか育種、病害虫試験や被害調査、農業技術の普及や教育、青年農家の育成や経済支援、農業関連の調査等を行っている。台湾の耕地面積は52万ヘクタール、農家人口は約51万人。1984年からは米が過

剰生産となり、当時64万ヘクタールあった水稲作付け面積に対し、他の作物への転換を奨励し現在の約30万ヘクタールにまで減反した。また、世界貿易機関(WTO:World Trade Organization)に加盟後、フルーツ生産が50%減少している。

このような状況下で、桃園区農業改良場では、転換作物の栽培方法や輸入作物との競争に対応



写真-7 桃園区農業改良場の水田視察風景

するための有機米などの有機栽培方法について重点的に試験・研究を行っているということであった。

## 8. おわりに

イラク戦争開戦が現実のものとなり、更には新型肺炎といったニュースにより不安感が漂う中でも、参加者のご協力のもと順調に行程を消化し、予定通り3月22日に全員が無事帰国することができた。帰国後も新型肺炎発症の知らせはツアー参加者からはなかった。

今回、海外における国際会議出席や研究施設の訪問により見識を深めることができた事は言うまでもないが、同行の方々と面識を持つことができたことも大きな収穫であった。誌面を借りて、ご協力いただいた同行各位、並びにお世話いただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。



写真-8 植調調査団一行 台北市内にて